Toyota City Museum
Of
Local History

豊田市郷土資料館だより

No.111

重要伝統的建造物群
保存地区選定 **10周年**

足助の町並み

足助重伝建10
足助重伝建地区選定10周年

目次

足助の町並みが、重伝建地区選定から10年を迎えました!! 2
民具調査だより－32
軒下しらべ〈重伝建10周年によせて〉 4
豊田で発見！茅葺き屋根のタイムカプセル 5
都市の交通・路面電車を支えた近代化遺産の「敷石」 6
博物館の模型が交流館を巡回！／僕らの町の博物館を中学3年生がデザイン！ 7
とよた歴史マイスター活動紹介
第1回拓本づくり開催！ 8

ISSN 0919-0120
202109 No.111

足助の町並みが、重伝建地区

足助の町並みが国の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）に選定されてから令和３年６月20日で、10年を迎えました。

今年１年を通して、伝建制度を運用してきた10年間の成果を振り返り、これから先の10年、20年後にも町並みを残し活用していくための方法を検討し、実施しています。

足助の町並み

足助の町並みは、江戸時代の安永４年（1775）に起きた大火後の再建が基礎となっており、現在も旧伊那街道（飯田街道）沿いには江戸時代後期から明治期にかけての建物が多数現存しています。また、大正期から戦後に建築された建物の多くも、伝統的な町家の形式が踏襲されており、町並みの景観が守られてきました。

複数の時代の建物が旧伊那街道に沿って建ち並ぶ町並みが評価され、平成23年６月20日、愛知県で初めての重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

重伝建選定後の取組

①修理修景事業（平成24年度～）

町並みを構成している建物や板塀などに生じた経年劣化による傷みや、後世に改変された箇所などを、補助金を活用して修理する重伝建の重要な事業です。

令和３年度までに、延べ30件の修理を実施しており、次の世代へ建物を健全な状態で残しつつ、町並みの景観向上のための整備を図っています。

②防災施設整備事業（平成29年度～）

重伝建地区は木造の建物が隙間なく建ち並んでおり、ひとたび火災が発生すると周囲に延焼する危険性があります。

重伝建地区を火災から守るためには、初期消火が重要です。そのため、町並みに消火器や消火ハリアー（簡易水道消火器具）を設置し、住民が使用できるよう防災訓練を行っています。

また、大型の消火用貯水槽や防災倉庫兼公衆トイレの整備も合わせて実施しています。

文化財的価値の高い柱や梁を残しつつ、
外観は極力本来の意匠に復原しています。

防災倉庫兼公衆トイレと消火用貯水槽を整備し、
町並みに防災拠点を確保しています。

選定から10年を迎えました!!

重伝建地区選定 10 周年事業について

①重伝建地区選定 10 周年事業実行委員会

令和 3 年から、足助 7 町の各代表者による実行委員会が組織されました。これまでの 10 年の振り返りを通じて、足助の町並みの未来を見据えて、伝建制度をこれからのまちづくりにどう活かしていくか考えています。

また、実行委員会で決定した本事業をイメージするロゴマークは、足助の町並みに関わる各種取組（掲示、物販、イベントなど）で、今後活用されていく予定です。

第 4 回実行委員会　活動風景

足助重伝建10
足助重伝建地区選定10周年

重伝建地区選定 10 周年事業ロゴマーク

ロゴマーク等に関する
詳細はこちら
https://denken-asuke.jimdofree.com/logo/

②重伝建地区選定10周年事業キックオフイベント

令和 3 年 6 月 20 日、重伝建選定日に合わせ、町並みの中央に位置する「旧田口家住宅」がオープンしました。オープン初日は、田口家に由来する民具の展示解説や職員による町並み案内が行われ、175 人の方にご来館いただきました。

来館者でにぎわう旧田口家住宅

民具展示解説

パネル展示風景

③「足助の町並み～変わったイイところ、変わらないイイところ～」

キックオフイベントと同日に、足助の町並みの歴史・特徴や、重伝建選定から 10 年の成果などを紹介するパネル展示が旧田口家住宅で始まりました。

修理修景事業を活用された住民に、制度を利用したきっかけ、修理後の住居の感想などをインタビューし、その内容を紹介する初めての展示となっています。

（安藤由真）

関連情報

旧田口家住宅

開館日時≫

月、水、金曜日の午前10時～午後5時まで

足助重伝建地区
選定10周年HP

伝建かわら版
フェイスブック

軒下しらべ〈重伝建10周年によせて〉

軒下に商品を吊り下げて

私たちは、有形の民俗資料である民具（生活文化文化財）を分析することで、暮らしの中で使われてきた道具やその道具を生む技術を知ることができます。例えば、電気が導入される以前の生活の場では、どのような光源がどんな形の器具を用いて使われていて、当時の人々の暮らしぶりはどんな風であったのか？あるいは、機械化される以前の農業では、人力や畜力で手に負える程度の仕組みを備えた道具を使い、その営みを行っていました。以上のような手元にある民具を分析するだけではなく、暮らしの痕跡を留めている現場へ出向き、資料を採集することも大切な作業だと考えています。

今回の“民具調査だより”は、足助の町をフィールドにして、ほんの少し前の暮らしの様子をうかがい知ることができる資料を採集した報告をお届けします。

ホーロー製
W65 H160 t2

■「お断り」の表示

軒先よりさらに踏み込んで家の軒下まで近づくと、玄関の上方や左右の柱にさまざまなものが張りつけられている様を見ることができます。左写真のプレートからなにが読みとれるか…。“押売り”“物もらい”“たかり”などの掲げられた言葉は現代の生活の中にあっては死語となっていますが、筆者は子供のころ、家の玄関先にやって来た刑務所を出て来たばかりだという押売りと母親のやりとりを覚えています。“物もらい”“たかり”といった言葉も今では説明をしないと理解されない言葉になっています。現在はちょっと言葉を変え“セールス”や“訪問販売”といったスタイルで生き延びているようです。

■国旗の掲揚

昭和のころまで、“はたび”という言葉が普通に使われていたように思われますが、“はたび”は“旗日”のことで、この日は各家ごとに日の丸を掲げましょうという日でした。祝祭日には国旗の日の丸の旗を玄関先に掲げた家々を目にするのが当たり前の風景でした。そんな少し前の日本では当たり前であった慣習もいつのまにか下火となりました。でも目を凝らして観察すると、改築がなされていない家屋の軒下には往時の暮らしの痕跡を遺した品々を発見することができます。下の写真２種は、日の丸を掲げる時に使う旗竿受けの姿です。

木製　W81　H242　t11(t40)
左：収納時　右：使用時

金属製
W50　H145　D85

右の金属製のものを記憶している方はおられると思いますが、左の木製の旗竿受けは逸品中の逸品であります！

（東海民具学会 岡本大三郎）

関東から豊田に引越してきたとき、まず驚いたのが山間地域に茅葺き屋根の民家がたくさん残っていることでした。関東の山間地域では数少なくなった茅葺き屋根が、市内の至る所に見受けられ感動したことを覚えています。昔話にも登場する茅葺きの民家。草屋根ともいわれるこの屋根ですが、屋根材になる“茅”という草をみなさんはご存じでしょうか？

植物図鑑には載っていない“カヤ”

実は茅葺きの茅とは、「草を刈り採取し、利用するためのイネ科の草の総称」つまり呼び名のようなものなので、植物分類学上の名前ではありません。ですが、茅という言葉は広く知られています。それは様々な地域にカヤと呼ばれる植物が存在し、生活に利用されてきたからです。

豊田の山間地域や白川郷の屋根で使われている茅といえばススキ、同じく世界遺産の五箇山の茅といえばカリヤス、京都の桂離宮の茅といえばヨシというように、“茅葺き”といっても地域により使用する植物種は異なり、多様な地域性をもっています。屋根材や農業資材など多岐にわたる“茅”利用の中で、今回は旭地区の屋根葺きの様子をご紹介します。

屋根をめくり、屋根を葺く

昨冬、伊熊町にある民家で 75 年ぶりの丸葺き（屋根の 4 面全てを葺くこと）がありました。屋根は面の下部から上に向かって段々に葺いていきます。葺く際に茅を引き抜き、職人さんがより分けていくのですが、トタンをはがした屋根の表面に出るのは、腐食して短くなった茅の層です。それを除けると次に黒光りするほどにつややかでよく燻された茅（古茅）が出てきます。驚くことにこの古茅は状態がよく、屋根材料として使用しても次の葺替（約 30 年後）までもつそうです。また黒光りの茅をよく見ると、ススキの中にカリヤスやトダシバ、カシワ、コナラ、オオバギボウシ、ワラビといった植物が見つかりました。現在の茅場にもススキは多く自生し、茅刈りで束を作る際にはセイタカアワダチソウやササがよく混ざります。ですが今回の古茅の中にこれらは含まれず、むしろ地域から減りつつあるキキョウやオミナエシなどと混生する草原性植物が含まれていました。現在、市内では多くの草原性植物が希少なものとなっており、これらが屋根素材として当たり前に使用されていたことは大変な驚きでした。なお、希少な草原性植物は草刈と集草に影響を受けるものが多いので、75 年前のこの地域には茅場や採草地など多くの“管理された草地景観”があったことが推測できます。

茅の下の層は麦カラです。この下地の層の定番は稲藁ですが、この屋根は麦カラでした。当時のこの地域は、稲藁よりも麦カラが手に入りやすい農的事情があったのでしょうか？これを降ろすと出てくるのは骨組みの谷中竹です。この竹は虫食い一つなく、細いながら肉厚でよくしなる良質の竹でした。職人さん曰く「現在の竹は病気のものが多く、このような竹は手に入らない」そうです。また「各地の屋根を巡っていると、燻された谷中竹や古茅でも状態が悪く、次に使えない屋根もある。今回の屋根の葺替で谷中竹や古茅が使いまわせるのは、75 年前に素材を集めた人々の目利きが良かったから」とも、屋根を葺きながら教えてくれました。かつてのこの地に、素材選びの目利きがいたことや 100 年先まで使える素材を作りだせる技術力（百姓の知恵）があったこと、地域のユイ（交換労働）の尊さ、当時の植生景観や土地利用…など、トタンの下の草屋根の中には、地域の昔の様子を伝える素材がたくさん詰まっていました。茅葺き屋根がもつ記憶…ぜひ屋根の中を覗いてみてください。（岡本淳美）

都市の交通・路面電車を支えた 近代化遺産の「敷石」

― 名古屋市電の敷石を転用した豊田市郷土資料館の敷石・敷石の産地だった豊田市 ―

写真③

平成 10 年（1998）開催の特別展「乗り物の歴史−近代豊田の交通−」を担当したとき、郷土資料館の通路の敷石は旧名古屋市電の敷石が使われたものだと、先輩職員から教えてもらいました。他の職員にも聞いたところ、このことを知る職員もいましたが、その詳細については不明でした。なお、豊田市郷土資料館は昭和 42 年（1967）1 月に開館しました。今回改めて調べ、分かったことを報告します。

名古屋市電について

名古屋市電は、名古屋市が経営していた路面電車でした。明治 31 年（1898）に名古屋電気鉄道によって日本で 2 番目に開業され、後に市営となりました。しかし、昭和 30 年代半ばから自動車の増加により定時運行が難しくなった理由等で、地下鉄を整備する代わりに、市電は昭和 49 年（1974）3 月に廃止されました。

市電廃止後の不要となった敷石は約 10 万枚。廃止発表後、宅地ブーム等で注文が殺到したそうです。敷石の材質は、花崗岩。大きさは 3 種類あり、長さは 97・59・46cm で、幅 40cm、厚さ 10cm です。そのほとんどが岐阜県の中津川市産。敷石は板石舗装と呼ばれて昭和 30 年代まで使用され、昭和 40 年代以降はアスファルト舗装になりました。

敷石遠景（南側入口）

敷石　厚さ 約 10cm

主な敷石　幅 約 40cm
長さ 約 59cm と約 46cm

写真①　郷土資料館通路の敷石

写真②　高橋地区矢並の花崗岩で、昭和 53 年に整備された七州城隅櫓横の土塀下の石垣（小坂本町・美術館の西隣）

郷土資料館の敷石について

郷土資料館の敷石を計測したところ、おおむね長さ約 59cm と約 46cm の 2 種類が大半を占め、幅約 40cm、厚さ約 10cm でしたが、名古屋市電の敷石と同じサイズで、日本工業規格（JISA5101）〈昭和 25 年制定、昭和 63 年廃止〉と合致しています。

また、昭和 42 年の郷土資料館の開館を知る元館長や職員に聞いたところ、名古屋市電の敷石であること、名古屋市昭和区八事の半僧坊の辺りのものであること、開館後少しずつ整備していったことなどが記憶されていました。

新たに分かったこと

以上のことから郷土資料館の敷石は、名古屋市電の敷石を転用したものであったことが分かりました。

また、高橋地区でかつて敷石を生産していた記録が「日本石材工業新聞」の記事にありました。一部を紹介すると、昭和 29 年、全国軌道敷石研究会会員に「愛知県西加茂郡高橋村（現豊田市）矢並・島村常太郎」の名がありました。また、岐阜県の恵那などと、愛知で組織された「中部軌道用石材生産協同組合」の理事長に島村常太郎氏の名があり、矢並で産出する花崗岩を「挙母石」と記載していました。

『日本石材史』（昭和 31 年刊）では、高橋地区（旧高橋村）一帯から中央線大井町駅（現恵那駅）地帯まで「高橋みかげ」の産地で、電車軌道用（敷石）として全国でもその量を誇っているとしています。

なお、『高橋村史』（昭和 60 年刊）に「石材業」の項目があり、矢並に切り出し場のある奥村石材、島村工務店の 2 軒を紹介しています（現在は 2 軒とも石材業はしていません）。今回、奥村石材の関係者から、敷石を生産し、中津川に石材を運んだこと、七州城隅櫓の整備時に矢並の花崗岩**（写真②）**を使用したこと、矢並の花崗岩は粗目であったことなどのお話を聞くことができました。

さらに、郷土資料館から北へ約 1.3km にある平芝坂の上公園（旧豊田市交通公園・平芝町）には名古屋市電 1800 形 1814 号車（昭和 28 年製造・昭和 45 年廃車）が保存・展示されています。**（写真③）**今回紹介した「敷石」から都市の発展に寄与した路面電車や豊田市が敷石の産地であった歴史に思いをはせてみてはいかがでしょうか。

（児玉文彦）

みんなでつくる新しい博物館

博物館の模型が交流館を巡回！

令和６年の開館に向けて、準備を進めている（仮称）豊田市博物館。令和３年３～７月に、高橋・前林・若園・朝日丘・崇化館の５つの交流館で博物館の模型を展示しました。

若園交流館での展示の様子

（仮称）豊田市博物館の模型

設計者は、
世界的な建築家の
坂 茂（ばんしげる） 氏です。

七州城隅櫓の石垣で遊んでいました。美術館の駐車場は田んぼで、小川で魚を取って遊びました。童子山小学校は運動場が上と下の２つあり、上から下へ土手を滑って遊びました。運動場の南の大松は伊勢湾台風で倒れました。子どもが３人くらいで抱えられる大きさでした。
（昭和 30 年代）

母と一緒に三河線に乗って豊田市駅で下車。商店街を歩いて長崎屋でショッピング、そして最上階（？）での食事。幼少の頃の何気ない日々ですが、大切な思い出です。（1970 年代後半）

新しい博物館では、豊田市に伝わるモノとともに、人々の記憶を収集し、紹介する取り組みを行います。
記憶の収集は、「記憶あつめるプロジェクト」としてすでに始動しており、ここでは、交流館での模型展示の際に投稿してもらった、思い出の風景に関する記憶を紹介します。

博物館準備室のホームページ、インスタグラム「#豊田市未来への記憶2021」でも記憶を募集しています！

博物館準備室
ホームページ

僕らの町の博物館を中学３年生がデザイン！

令和３年６～７月、豊田市役所で井郷中学校の生徒がデザインした博物館の作品模型等を展示しました。

美術科の授業の一環として、タブレット端末を活用し、博物館のデザイン案を作成するところからスタート。博物館設計者の 坂 茂 氏の助言を受けながら検討を重ね、生徒ひとりひとりが思い描く博物館の姿が、模型として完成しました。

とよた歴史 マイスター活動紹介

マイスター活動 | 7/13(火)・24(土)

第1回 拓本づくり開催！

第１回は、郷土資料館の石碑の拓本づくりを行いました。

参加された 12 名の方は、まず髙橋学芸員のレクチャーを受けてから、気温 30℃の郷土資料館の庭園へ向かいました。前回のマイスター基礎講座での土器片の拓本づくりとは、屋外であることと拓本の対象物が大きいことが大きく違います。

今回は３人ずつのチームに分かれ、いよいよ拓本づくりに挑戦！ 画仙紙に十分に水分を含ませますが、好天のため石碑の上部からの乾燥が早く大変神経を使う作業でした。３人のチームワークがよく、どのチームもきれいに拓本どりができました。

熱中症の暑さ指数が心配されましたが、給水休憩をとりながら、楽しく作業ができました。

初回はチームで拓本づくりを行いました。２回目からは一人で一基とります。活動は毎月第３火曜日と第４土曜日に開催します。今後、状況を見て民芸の森や七州城址など活動範囲を広げていきます。

（伊藤俊満）

とよた歴史
マイスターの
拓本作品

■豊田市郷土資料館利用案内■

開館時間　午前９時～午後５時
休 館 日　毎週月曜日（祝祭日は開館）、年末年始
入 館 料　無料（特別展開催中は有料）
交通案内　名鉄「梅坪駅」より南へ　徒歩 10 分
名鉄「豊田市駅」より北へ　徒歩 15 分
愛知環状鉄道「新豊田駅」より　徒歩 15 分
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ　徒歩５分
駐 車 場　約 20 台

●豊田市郷土資料館だより　No.111

令和３年９月 16 日発行
編集・発行　豊田市郷土資料館
〒471-0079 豊田市陣中町1-21-2
TEL.0565-32-6561　FAX.0565-34-0095
E-mail● rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL● http://www.toyota-rekihaku.com
FB● https://www.facebook.com/toyotarekihaku
※豊田市郷土資料館だよりは、HP でもご覧いただけます。